浦賀文化

第85号

令和８年４月１日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

浦賀と三崎

前号でオランダ通詞が三崎に詰めていたことを紹介したが、その三崎について浦賀との関係を中心に紹介したい。

浦賀奉行所が設置される以前より三崎には番所が設置されていた。そもそもは元和四年（一六一八年）に御船奉行向井将監（しょうげん）忠勝が三崎御番（ごばん）を命じられたことに端を発する。その後、寛永九年（一六三二年）に走水御番の兼務となり、正保二年（一六四五年）に三崎番所・走水番所と改称された。この時は両番所にそれぞれ与力五人、同心三十人が配置されている。二つの番所は一体となってその機能を果たしており、上り船（江戸から出て行く船）を三崎番所が、下り船（江戸に入る船）を走水番所が担当して船改めを行っていた。元禄九年（一六九六年）に下田奉行所にその機能が引き継がれると三崎は代官の支配となった。

享保五年（一七二〇年）、下田奉行所が廃止して浦賀奉行所に船改めの業務が引き継がれると、三崎には御役宅と呼ばれる浦賀奉行所の出張所が置かれ、浦賀奉行所の関係機関として機能を果たすようになる。浦賀奉行所の関係機関は他に奉行所・番所・江戸御役所・下田御用所の四カ所あったが、これらにはそれぞれ与力・同心が交代で配置されて職務にあたった。

三崎御役宅には与力一人、同心目付・平同心各一人の合計三人が一ヶ月交代で詰めていた。役宅は陣屋山の麓にあり、間取りはわからないが応対所・与力詰所・同心詰所・勝手などがあり畳が三十五畳敷かれていたことはわかっている。役宅の機能としては難船の処理を主として海上での拾得物の取り扱い、流人船の確認や城ヶ島簞屋（かがりや）・安房崎遠見番所の管理に三崎町と周辺地域の支配などがあった。難船の処理などは下田御用所とも共通しているが、下田と大きく異なるのは三崎町の支配関係という地方（じかた）業務があるところである。三崎御役宅も下田御用所も奉行所の出張所ではあるが、下田が難船処理などの浦方業務のみ（地方は代官江川太郎左衛門の支配）であるのに対し、地方業務がある分、三崎御役宅の方が役の重要性が高かった。下田が同心のみの在勤であるのに対して三崎には与力が詰めていることにもそれが現れている。しかしながら多くのことについて奉行所の裁許を仰ぐ必要があるため裁量権が与えられていたわけではなかった。

三崎御役宅に関する史料はそれほど多く残されているわけではないが勤務の実態などはある程度明らかにされている。いくつかある関連史料の中に、浦賀奉行所で同心を勤めた中村家の史料にある「三崎在勤中御用留」というものがある。この史料の天保八年（一八三七年）三月の記録には、前月に大坂で乱を企てた元大坂町奉行所与力の大塩平八郎一味の手配書についての記述があり、大変興味深い。

三崎町は浦賀奉行所の管轄であって御役宅が奉行所の裁許を仰ぎながら支配関係の業務を行っていたが、文化八年（一八一一年）に会津藩が江戸湾海防の担当になると久比里や吉井同様、三崎にも分郷ができて三崎の東側が浦賀奉行所管轄、分郷となった西側が会津藩の管轄となった。この分郷は、文政四年（一八二一年）に会津藩が防備担当を離れてからは有事の際に浦賀への援兵を命じられていた小田原藩が、それからは川越藩、彦根藩、萩藩（長州藩）、熊本藩と代々三浦半島の防備を担当した藩の支配となった。

三浦半島の南端にあったことから異国船来航時にはその第一報を浦賀奉行所に通報することもあった。天保八年（一八三七年）六月のアメリカ商船モリソン号来航時や嘉永二年（一八四九年）閏四月のイギリス軍艦マリナー号来航時は三崎詰めの浦賀奉行所与力からの通報が浦賀奉行所への第一報となっている。

三浦半島の南端である城ヶ島と房総半島の南端である洲崎間のラインは、乗留線（のりどめ）として江戸湾海防に於ける重要な防衛ラインとされた。異国船対応の重要性が増したビッドル艦隊来航後、そのような場所に位置している三崎に異国船に対応するためのオランダ通詞が配置されたのは必然だったと言えるだろう。

（山本　慧）

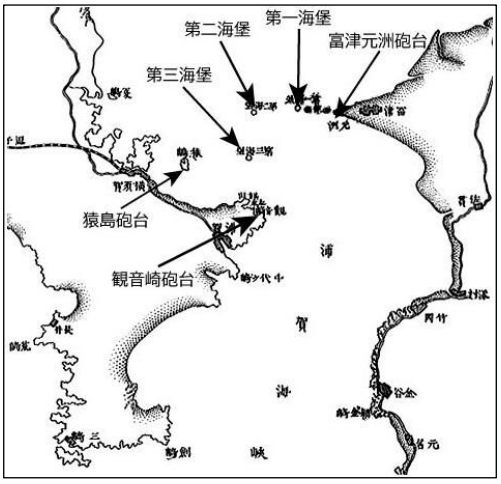
★参考文献・史料
・「通航一覧続集」第４巻
・「三崎郷土史考」臨川書店　一九八七年復刻
・『新横須賀市史　通史編　近世』
・「浦賀奉行所関係史料第二集
中村家文書・浦賀詰下田問屋旧記控・他」

我が国近代砲台事始め
―観音崎砲台―

皆様、はじめまして。今回から本稿を担当することになりましたデビット佐藤です。東京湾要塞研究家として、主に三浦半島に残る戦争遺跡の調査・研究を行い、その成果をＳＮＳや講座、講演などを通じて発信することをライフワークとしています。そんなわけで第一回目は、私が戦争遺跡に興味を持つようになった原点の一つである、観音崎の砲台についてお話ししたいと思います。

観音崎と聞いて多くの方が思い浮かべるのは、観音埼灯台ではないでしょうか。日本で最初の西洋式灯台として、教科書にも登場する存在だからでしょう。実はこの「日本初」は灯台だけではありません。西洋式近代砲台が日本で最初に築かれた場所も、ここ観音崎なのです。そのため近年では、砲台も観音崎の重要な見どころとして認識されるようになってきました。しかも観音崎には、九つもの砲台が築かれていたのです。

建設が始まったのは明治一三年五月、最初に着工されたのは第二砲台です。翌六月には第一砲台、続いて明治一四年に第三砲台、明治一五年には第四砲台と、段階的に工事が進められていきます。また観音崎だけでなく、明治一四年には第一海堡や猿島、明治一五年には富津元洲砲台が着工されるなど、観音崎と富津の間に砲台が建設されていきました。お気づきだと思いますが、これらの砲台は三浦半島の観音崎と房総半島の富津を結ぶ形で築かれました。つまり、東京湾口において敵艦の侵入を阻止することが目的だったのです。



ところで、江戸時代にはすでに台場が築かれていたはずですが、それらはどうなったのでしょうか。

幕府の瓦解とともに新政府に接収されますが、そもそも旧式であったこともあり、維新の混乱の中で廃止され、設備は撤去、土地も払い下げられていました。そのため明治陸軍は、改めて土地を買収し、新たに砲台を築く必要があったのです。

砲台の建設地選定は、国土防衛上極めて重要な問題です。首都東京、そして軍港横須賀の入口にあたる東京湾が、最初の建設地として選ばれたのは当然のことでしょう。

実際には明治九年から測量や用地買収が始まりますが、明治一〇年の西南戦争によって事業は一時中断されます。戦後、本格的に再開され、明治一三年五月の砲台建設へとつながっていきます。初めての本格的な西洋式砲台であったため、建設は試行錯誤の連続だったと推測されます。また、厳しい財政事情の中で建設費の捻出にも苦労があったことでしょう。その背景には、当時の朝鮮半島をめぐる日本と清との対立という、緊迫した国際情勢があったのです。

明治一三年から工事が始まった各砲台は、第一砲台、第二砲台、猿島砲台などが明治一七年に竣工し、次の段階として実際に据え付ける大砲の検討へと移っていきます。そうした中、明治一四年五月には明治天皇が観音崎砲台の工事現場へ行幸されています。このことからも、砲台建設が国家的な重要事業であったことが分かります。

当時の新聞にも観音崎の砲台建設のことが取り上げられ、国民の関心事でもありました。

こうした背景を踏まえて観音崎の砲台を見ていただければ、より興味が深まるものと思います。

次回は、明治天皇の行幸について、お話ししましょう。

（デビット佐藤）

笑話一題

近頃流行のＡＩに浦賀はどんなところか尋ねてみた。「ペリーの黒船来航で知られる歴史的な港町です。」と返答があった。その他に、「江戸時代には奉行所が置かれ、江戸の海の玄関として繁栄した」「近代は、浦賀ドックで造船の町としても賑わった」「東浦賀と西浦賀を結ぶ浦賀の渡し（渡船）がある」…と説明が続く。

さらに、ＡＩからもう一歩踏み込んだ説明があったが、ご存じだろうか。「ペリー来航を受けて日本初の洋式軍艦が造られた」「浦賀奉行所与力中島三郎助の波乱に満ちた生涯について」「浦賀ドック内に現存するレンガ積みドライドックは、世界に数カ所しかない貴重な遺構である」「渡船は全国的にも珍しい市道である」「水飴が名産品であった」など。

浦賀文化は、郷土史家や各方面の専門家に寄稿していただき、ＡＩにはない情報が満載である。バックナンバーもあるので、ぜひ再読してほしい。

（ポンポン丸）

４月より、コミュニティセンター使用料金が変更になります。

浦賀コミセン分館

学習室名		
現料金	新料金	
	市内	市外
第１学習室		
200円	**300円**	600円
第２学習室		
200円	**300円**	600円
第１・第２学習室		
400円	**500円**	1000円